

2018年10月21日

2018年10月 Nr. 451

さて、今回は、かつて住んだ共同住宅〔シェアハウス〕(WG)を旧居住者たちが当時を懐かしく振り返える様子を取り上げられています。

オーデーさん (Frau Odeh) は、パレスチナ出身であり、アラブ人女性です。彼女はボン大学で学び、1994年に卒業後、南ドイツ放送局で実習生として働くためにシュトゥットガルトへ引っ越しました (当初一人住まいの老夫人のところに部屋を借り、その後WGに移り住み、1997年に彼女はレバノンに行くことにより、彼女のWG生活は終止符を打つこととなります)。これはラジオ放送局のジャーナリストになるための職業教育でしたが、これによってお金をもらうこともなかった代わりに、全く支払いもしなくて済みました。最初は、彼女は一人暮らしの年老いた女性の元で家具付の部屋を借りました。ところが、そこは彼女には快適ではありませんでした。一方では、放送局では皆がいつも忙しく働いており、誰かと知り合いになることに興味があるように思える人は誰もいないようでした。

しかし、ある日ニュース編集部の男性ジャーナリストが彼女に対して彼の住んでいるWGの一室に空きがあるけれど入居する気はないかと勧めてきました。そのWGは、郊外にあり、美しい庭を備えていました。道路沿いに家並みが連なっていましたが、その家は、二列目で斜面に建っていました。すぐ裏は森となっていました。森は庭のほうに少々入り込んでいたほどでした。その家と庭の間には、ビアホールにあるような大きなテーブルが一台、ビアホールにあるような腰掛けがいくつかとパラソル一本がありました。家の中には、住人のために三つの居住階がありました。一階、二階それに加えて屋根裏部屋です。

このWGには居住者が五人いましたが、その後同居者の女性一人がそこから出て行き、その結果四人になってしまいました。従って、その四人はWGの新しい入居者となる仲間を捜していました。ちょうどその頃、オーデーさんがニュース編集部の男性ジャーナリストと言葉を交わしたのです。

さて、オーデーさんをそのWGに迎えるかどうか、決めなければなりません。同居者の一人の女性は、これから他の文化圏から誰かが彼らのもとに入居してくるのはとても興味があると思いました。しかし、オーデーさん自身は、このWGに自分が馴染めるかどうかとても懐疑的でした。他の人達は、それほど懐疑的ではありませんでしたし、一人の女性同居人は、とにかく入居してもらったらと意見を述べました。もしオーデーさんが順応すること

ができなければ、その時は彼女がまた出て行くだろうから、と付け加えました。この WG は当時すでに、かなり長い間存続していましたし、誰かがそこに新たに入居するということは既に時々あったことでした。

この住宅では WG の住人だけでなく、WG のある三つの居住階に加えて、地下室がありましたが、そこには家主の女性が住んでいました。その家主は、夜 10 時以降は安眠妨害されないように、10 時までには食器洗い機でのすべてのすすぎや乾燥の作業は常に終わっていることと、その時刻以降はもう自分の地下住居があるがゆえに一階のトイレには誰も行かないことも要求していました。

Bosch に勤めていたインゲ (Inge) という女性は、当時すぐ上の屋根裏部屋に住んでいました。これは彼女にとって大きな利点がありました。彼女は WG での共同生活を楽しむことができた一方で、上に行ってとにかくドアを閉めることができたからです。また彼女は自分の部屋には専用の小さな台所スペースを持ってましたし、自分だけのトイレやシャワーもありました。

彼らが当時庭で行ったパーティーなどの催しについては、いまとなっても彼らの良き思い出となっています。当時彼らがちょっとまたパーティーでも催したいと思った場合には、家主の女性に対し、早めにその旨言う必要がありました。そうすると喧噪を避けるため家主は週末にかけて旅行に出かけていたといえます。

この WG の最古参の女性は 1984 年に入居したようですが、初めの頃は WG では、混乱状況にあったといえます。しかしながら時間の経過と共に、居住者達は徐々にルールを作っていました。その内の一つが、共同生活者として肉食主義者はお断りというものでした。なぜならば、ベジタリアンにとっても、それ以外の居住者が時折豚肉の大きな塊を煮込んで、その匂いが家中に充満した上に、そのベジタリアンもその食費を分担しなければならないとしたら、不愉快だっただろうという理由からでした。居住者は、一つの共同の家計費用で運営されており、すべての費用は単純に 5 で割っていたからです。

彼ら居住者たちの多くのルールがあったために、ここはかなり清潔な WG でした。WG 内の作業の分担では輪番制を採用しませんでした。ある人は浴室を担当し、またある人は台所回りを、そして別の人は共用ルームを、更に別の人は他のことを担当する、というようにしました。その担当は常に同じ人がずっと担うという専任制だったのでした。誰もがその人に一番合っていることを行いました。このこともすばらしいとオーデーさんは思いました。しかしながら、彼女がとりわけすばらしいと思ったのは、入居者達が一緒に行ったことでした。例えば、日曜日毎には殆どいつも一緒に入居者達が朝食を取りました。ある女

性の住人は、早起きが好きで、焼きたてのブレードヒェンを買うために大抵パン屋に行ってくれたり、コーヒーを入れたりしてくれたものでした・・・。

さて、今回話題の共同住宅は、日本では最近シェアハウスという表現を使うことが多いようですが、より短く表現できるWGを使用したいと思います。ドイツのあるWGのかつての居住者たちが、約20年前の数年間（初回放送は2015年10月ですので、約20年前の1994年頃からの数年間）のそこでの生活を懐かしく偲んでいます。特にアラブ人女性のオーダーさんにとっては、ここでの生活は特別な意味を持っていた様子が窺えます。当時大学卒業後、実習生として放送局で働きますが、仕事に追われる日々が続き、部屋を貸してくれた年老いた女性家主との関係も良いとは言えない状況にあり、公私共困難な状況に置かれていたということです。そのようなとき、同じ職場の同僚男性がWGへの入居の話を持ってきました。オーダーさんがアラブ人であるにもかかわらず、既メンバーは概ね賛成でしたが、むしろオーダーさん自身が馴染めるか懐疑的であったようです。それにもかかわらずそのWGへの入居を決めたのは、リスクも冒してでもそのひどい状況からとにかく早く逃れたいと思ったのではないかと私は想像します。そして、20年後に当時を懐かしく振り返ることができた状況から判断すると、当時のその試みは、大成功だったようです。

オーダーさんが当時を振り返って良かったと思う一つとして、ほぼ毎日曜日の朝には皆で焼きたてのブレードヒェン（*frisches Brötchen*）を食べられたことだと述懐していますが、私にも40年以上前の似た思い出があります。当時学生だった私はリュネブルクのゲーテ・インスティトゥートで語学研修を受けていました。そこでは受講生が授業前の7時頃から朝食を学校で取っていましたが、そこで供されていたのは、牛乳、茹で卵、バナナそれにブレードヒェンでした。そのブレードヒェンは焼きたてで実に香ばしい香りがしたものでした。当時の私にはドイツパンは余りなじみませんでした。この焼きたてのブレードヒェンは香ばしくて格別に美味しかったことを覚えています。

また、このWGではさまざまな業態・分野の5人が生活するだけでなく、その友人・知人とも知り合いになる機会がありましたので、他の業界の状況についてより情報を収集したり、交友範囲を広げたりするのに役に立ったとある入居者が指摘していた点も印象に残りました。

ところで、放送・課題において家主から食洗機の使用時間の厳守について触れられていますが、当時すでに食洗機がWGにおいて使用されていたことに驚きました。インターネットで調べてみたところ、ドイツの家電メーカーのミーレの2017年の調査によると、ドイツや米国における食洗機の普及率は80%であるのに対し、日本では30%ということでした。当時のドイツでの普及率はもっと低かった可能性はありますが、少なくとも日本よりはる

かに高かったと思われますので、WGにおいて食洗機が設置されていたことはごく普通のことだったのかもしれませんが。私の認識を改める必要がありそうです。

さて、このWGでの取り決めで実におもしろいと思ったのは、いわゆるベジタリアンの入居はお断りというものです。その理由は、肉料理の調理の匂いが菜食主義者には不快であるだけでなく、肉を食べないにもかかわらずベジタリアンもその食費を負担するのは良くないからという判断には合理性はありそうです。実際に入居を希望した非常に感じの良い青年が面談にやって来て、既メンバーもその青年の入居に賛成したところ、その青年が実はベジタリアンであることを告げた途端、入居できなかったことが紹介されています。また、このWG内での仕事の分担が輪番制ではなく、専任制というのも、一般的に輪番制と専任制のどちらが多数派であるか分かりませんが、放送を聞くとなるほどだと思いました。

WGはシェアハウスとして最近の日本でも普及してきているようですが、シェアハウスについてあまり知識のない私としては、食費の負担や食事の準備や片付けの分担についてどのようになされていたのか気になります。今回登場してくるWGでは、ほぼ毎日曜日には皆で朝食を取ったということですが、それ以外の食事、例えば主に夕食では生活のサイクルが各人異なると思いますが、同じ時間帯で同じものを食べていないと思われます。アルコールやチョコレートなどの嗜好品については、消費する各個人が負担するとしても、保存の利く材料としてのパスタやレトルト食品、冷凍食品などについても各個人が消費する頻度や量が異なるはずですので、単純に5で割るのは不公平にも感じますが、運営を複雑にしないためには月末で合算をして単純に5で割っていたのでしょうか。

さて、今回話題になっているこのWGですが、放送の最後に現在は存在していないことが紹介されています。このWGの所有者の女性は、最晩年の80歳を大きく超える年齢だった頃、当時の居住者たちは何かと彼女の世話をしていたようです。オーデーさんは内心では彼女の他界後も当時の入居者達が住み続けられるかもしれないと期待していたようですが、2006年の所有者の他界後それまでは全く姿も見せなかった甥が単独相続人として現れ、この住宅が売却されたことが放送の最後に紹介されています。法律に照らせば、「家主の死亡→相続人によるWGの売却」というのは当然の帰結とはいえ、ちょっと寂しさが残る結末ではありました。この放送を聞いた当時のドイツの聴取者の感想は果たしてどのようなものだったのでしょうか。

K. K.

2018年11月22日

2018年11月 Nr. 452

今回は、地域の産業振興や開発と自然保護が話題になっています。

シュペッサルト (der Spessart) は、マイン川の北西にあるドイツの中級山岳地帯であり、大部分はウンターフランケン地方に位置しています、すなわちバイエルン州の一部となっています。そのバイエルン州には既に国立公園が二つ存在しますが、今、バイエルン州政府は、そのシュペッサルトに三つ目の国立公園を造成しようとしています。しかしながら、多くの人々はこれに反対しています。彼らはむしろ産業用の土地がもっと欲しいと考えています。というのは、産業用地により新たな雇用が生まれ、企業の利益により自治体は、例えば保育園の財源とできるような営業税が得られるからです。

シュペッサルトに国立公園を造成することに対しては、いわゆるシュペッサルト・レヒトラー (バイエルン州政府からシュペッサルトの森の木を切り出すことができる特権を付与された者) らも反対しています。彼らはこの権利を 150 年来保有しています。しかしながら、国立公園になれば、当然そこから木を切り出すことは許されなくなります。彼らは、自分たちがシュペッサルトの森を知ってからこの方、シュペッサルトの森とは強く結びつき、不可分の関係にありますし、子や孫たちにもまたこのシュペッサルトの森を同じように継承したいと思っています。

国立公園の造成に賛成する立場の人々は、彼らシュペッサルト・レヒトラーと争っています。この計画中の国立公園の実現のためにとりわけ尽力している、ある自然保護活動家は、シュペッサルトの森に行く勇気はもはやない、行ったら自分の身に何か良くないことが起きるといふ懸念があるからだとい既に語っています。しかし、他の自然愛好者たちは、シュペッサルト・レヒトラーに対しては全く恐れを感じていないと言っています。彼らが不安を覚えるのはむしろ、薄暗いとき、例えば、夕暮れ時や夜明け時に森に出かけた時に、ハンターが誤って自分たちに発砲するかもしれないからだといいます。

多くの自然保護推進者たちにとって国立公園よりずっと重要なのは、産業の誘致などによりその土地の景観がますます破壊されていくことがないことです。住宅建設や道路建設によっても、農業経営による農産物生産のためだけでなく、洪水防護のために必要とされる広大な面積の土地が失われています。そして、典型的な景観が破壊される場所では、そのことが観光や近郊レクリエーションにもマイナスになるといいます。土地が消費され

ばされるほど、その分その土地の景観は失われていくということです。

Anbindegebot に従い、自治体はその土地利用計画の中では住宅建設のためにまたは産業用地としてこの種の他の土地と関係するか、直接接している土地を提供することができます。しかし、そこには非常に多くの例外が存在する上に、当時の担当大臣（現在のバイエルン州首相）はさらに多くの例外を許容したいと考えています。ところが、その大臣から起案され、バイエルン州政府がすでに決定し、州議会が承認するだけになっていた指令・規則に対し、多くの人々が抗議し、2018年3月1日に発効した指令・規則では計画された例外が今やまた廃止されています。

2017年11月9日にバイエルン州議会により議決された Anbindegebot の緩和策もまた、州政府が当初予定していた内容にはなっていません。バイエルン州農業者連盟は自然保護推進者たちと似た懸念を抱いています。バイエルン州農業者連盟は、存在している土地は大きくすることはできず、地面が一旦コンクリート処理がなされている場所では、農業用の用途にまた戻すことは不可能であると指摘しています。

これは中長期的に見た場合、後悔することになる誤りであるといえます。都市建設・国土計画アカデミー（die Akademie für Städtebau und Landesplanung）もまた、バイエルン州が無秩序な住宅建設で破壊された近隣諸国に自らの景観を合せるほど Anbindegebot が緩和されることは良くないと考えています。国境を越えてオーストリアへ車を走らせると、アウトバーンに沿って向こう側に産業地帯が見えます。一方で、産業地帯はバイエルン州ではアウトバーンから自国の故郷、例えばブナの森の広大な土地を擁するシュペッサルトをいとも簡単判別することができます。

景観的特色を有する地方はますます残り少なくなっています。バイエルン州では、毎年4,700ヘクタールもの森や耕地が新築家屋や産業用地に変わっています。企業は街から遙か遠い場所の新しい産業用地を好みます。近隣に住む住民への配慮が少なくて済むためですし、望むままに音を立てることができるからです。しかしこうすることにより、その土地の産業用地の価値は下がり、自治体は損害を被ります……。

ところで、今回の課題で特に印象的だったのは、バイエルン州では毎年4,700ヘクタール（放送ではサッカー競技場18面とドイツの一般のラジオ聴取者がより想像しやすい表現が用いられています）もの森や耕地が新築家屋や産業用地に変わっていると指摘されている箇所です。毎年この面積の自然の消失というのは、年という時間を考えると許容できる範囲と考えられるのか、いや年という期間を考慮しても余りにも広い自然が失われて行っていると思わすべきなのか、意見が分れるところだと思います（明確な根拠はないのですが、

私の印象では後者の意見に妥当性がありそうな気がします)。また、消失面積を表現するのにサッカー競技場が取り上げられていますが、ドイツだけでなくヨーロッパ全体でも人気のあるサッカーですので、この使われ方は一般的なのかもしれません(具体的には思い出せないのですが、私も別の機会にも耳にしたことがあるような気がします)。一方、日本ではある場所の広さを表現するのにしばしば用いられる典型的な例は、東京ドームです。実際に東京ドームで野球を観戦の経験のない人でも、「東京ドーム〇個分の広さ」と言われると何となくイメージが湧くからでしょうか(以前は甲子園球場が使用されていたと記憶しています)。この「サッカー競技場 vs 野球場」は、そのままドイツと日本での広さの表現の差を端的に表しており、おもしろい表現だと感じました。

さて、開発と自然保護は、その調和が重要であり、一方的に開発を優先することが良いともいえず、また自然保護を優先することが望ましいとも言えない面があるように思います。ある案件では開発を優先したほうが利点が多いことも有り得ると思われまし、また別の事案では自然保護を優先的に考慮しなければならないこともあるのではないかと思います。つまり、一般的なことを論じることは適切でなはないと思われましるので、結局は個々の案件、個々の場面で十分検討を加えながら、個別・具体的に結論を出していかなければならない問題であろうと思います。そしてその判断が正しかったのか、誤りであったのかは、その後の時間の経過と共に判明するものではないでしょうか。

ところで、開発と自然保護という観点で私が思い出したのは、先月ドイツで下された「ハンバッハの森」(Hambacher Forst)をめぐる判決です。ハンバッハの森はケルンとアーヘンの間に広がる森ですが、そこには電力会社 RWE が保有する広大なヨーロッパ最大の褐炭の露天掘り鉱山があります。その一角に残るハンバッハの森の木々の伐採をめぐる数百人の警察官と大手電力会社 RWE の職員たちと、樹木の伐採に抗議して森に立てこもる環境保護主義者たちが争っていましたが、地方裁判所は10月初旬、RWE の主張(電力供給のためにはさらなる森林の伐採が必要)に対し、これを差し止める判決を出しました。„Wald retten, Kohle stoppen“ „Hambi bleibt“ というスローガンを掲げていた数千人ともいわれるデモ参加者は一安心したようです。最終的な決着にはまだ大分時間を要すると見られますが、環境保護意識が特に高い今日のドイツでもまだ特に CO₂ 排出の多い褐炭に依存する電力供給が行われていることを知って私は意外な印象を持ちました。それだけ褐炭による電力供給が安価に行うことができるという証明でもあるわけですが、環境保護先進国ドイツとしては果たしてその道が正しいのか大いに疑問に感じました。

また、森林の消失で想起されるのが、時々話題に上るアマゾンの熱帯雨林です。ちょっと古いデータ（2014年）によりますと、過去40年の間にブラジルの熱帯雨林の内、何と76万3千km²が伐採されたといわれています。この面積はドイツの国土面積の約2倍に相当しますので、いかに広大な熱帯雨林が消失したかが分かります。これからも開発により熱帯雨林の更なる消失が続くと考えられ、この先アマゾンの熱帯雨林はどうなってしまうのか気がかりです。地理的に日本から遠く離れていることもあり、遠い世界で起きていることとして日本人の多くは考えがちですが、いろいろと調べるとどうもそうではないらしく、私たちが身近のできることを、例えば自らの食生活を見直したり、食糧を無駄遣いしないなどを実践することも必要のようです。

ところで、今回登場する単語の語尾 „...ler” が気になります。 „...ler” は手元の辞書によりますと、名詞につけて「人」「動物・植物」などを意味するもので、 „...er” の変形のようなようです。今回の課題および放送で Spessartrechtler、Holzrechtler が出てきます。私の手元の複数の辞書には掲載されていませんので、これらの正確な語義が不明ですが、放送内容から、また recht (Recht) を含むことから「・・・の権利を有する人」と考えられますので、それぞれ「シュペッサルトの森から木を伐採する権利を認められた人」、「森から木を伐採して取り出す権利を有する人」という意味だろうと思われます。手元の辞書には、 „...ler” の事例として Sportler 「スポーツマン」、Nachzügler 「遅刻者」、Einzeller 「単細胞生物」、Dickschnäbler 「ハシブトインコ」などが掲載されています。これらの語の内、私も Sportler だけは知っていましたが、 „...ler” の意味合いは知りませんでしたし、Nachzügler、Einzeller、Dickschnäbler などは全く知らない単語でした。また、今回 Anbindegebot という聞き慣れない単語も登場しますが、すでに知っている Reinheitsgebot (「ビール純粋令」) からの類推で法律の一種であることは想像できます。しかしながら、Anbindegebot も辞書に記載がなく、インターネットでも日本語の定訳が見つけられませんでしたので、果たしてどのような日本語が適切なのでしょうか。

K. K.

2018年12月23日

2018年12月 Nr. 453

さて、今回は、憂鬱（メランコリー）が話題になっています。Melancholieは、当初「憂鬱」と理解しましたが、学術上は「メランコリー」のほうが一般的に使われているような印象を私は持ちましたので、ここでは以下「憂鬱（メランコリー）」と併記しました。

中部ヨーロッパでは11月という時期に憂鬱な（メランコリック）気分になる人が多いようです。人々はクリスマス前の12月の4回の日曜日にはクリスマスを楽しみにしますし、日の出から日の入りまでの時間が再び徐々に長くなることも楽しみにするのに対し、その前の2回の日曜日はそれぞれ国民哀悼（der Volkstrauertag）の日と死者慰霊日（der Totensonntag）となっており、これらの両日曜日の間の水曜日は懺悔と祈りの日（der Buß- und Betttag）となっています。11月1日は「諸聖人の日」（「万聖節」）、翌2日はすべての死者の霊魂を偲びます（「万霊節」）し、11月には雨が降ることが多く、日が差すことが希であるということはこれにふさわしい雰囲気と言えます。

大抵の人にとって憂鬱（メランコリー）は否定的なもの・好ましからざるものですが、同時に芸術上は生産的でもあります。アリストテレスは、知的に卓越したすべての人々は憂鬱質（メランコリー質）の人だったと考えています。遅くとも18世紀の啓蒙主義以来、憂鬱質、アウトサイダーであること、それに内省的なことは、真の芸術家であることの諸特徴の一部をなしています。

人が憂鬱な気分（メランコリック）になった場合、日常生活から静寂・沈黙へと引きこもりますが、ある科学ジャーナリストは、これは実際的な理由からも良いことだと考えています。彼は、このようにして人は、例えば、一戸建ての家またはマンションなどの分譲住宅を購入しようとする場合、新しい考えを思いつき、ひょっとしたらよりよい決定を下すかもしれないというの见解とのことです。というのは、そうすると、案件をより慎重に検討するからだといいます。精神・文化科学者ハルトムート・ベーメ（Hartmut Böhme）氏は、創造力と世界苦〔感傷的な厭世感/観〕との間には密接な関係があるといいます。ベーメ氏は、従って、アーティストは、憂鬱（メランコリック）な状態に至った場合、そのことに対し、率直に感謝しなければならないだろうとさえ言います。

これに対し市民社会で重要なのは、自覚（意識していること）、注意（注意深いこと）そし

て自分の感情のコントロールだといいます。なぜならば、市民生活には就労可能であることが重要であるからだといいます。そしてそれには集中する能力、束ねたり、そして緊張したりする能力が不可欠です。それは、自覚（意識していること）や注意（注意深いこと）がなくては、だめだといいます。

精神医学では重い憂鬱症（メランコリー）は病気と見なされています。これは鬱病と呼んでいます。既に1800年頃、重篤な憂鬱症（メランコリー）のために精神病院において人には治療がなされていました。憂鬱症（メランコリー）が鬱病として治療が必要な精神疾患になると、これによって薬品産業も利益を得ます。就労中の者で精神的な問題のため就労不能の証明書を医師から発行してもらう人の数が増えています。これは医師や精神科医により新たな病状が発見されたからだと言指す人もいます。これは、人が問題を専門的に治療してもらうべきであるというプレッシャーが社会で生じていることと関係するといえます。

精神科医であり精神療法医でもあるギュンター・ゲッデ（Günter Götde）氏は、しかしそうした場合、誰かが引き籠もったり、内向的に生活したりしたとき、人は憂鬱症（メランコリー）が問題になっているかどうか議論しなければならないだろうという意見です。ゲッデ氏は、憂鬱症（メランコリー）は人生にはつきもの（人生の一部）だといいます。それとともに生きなければならないといえます。これを避けたり、迂回したりすることはできないということです。彼は、あれこれ考えること、多くのことに取り組むこと、それに問題を簡単には受け入れないことは良いとだと考えています。そしてもし誰かが社会的関係から解放される場合、それは正に憂鬱症（メランコリー）とちょっと関係しているといえます。

ゲッデ氏にとっては、憂鬱症（メランコリー）、個人的な失望および政治的なユートピア喪失は関連しています。人は自分の人生について、また社会における人生について肯定的な考えを有していたが、何となく失望させられます。彼は、憂鬱症（メランコリー）は、ユートピアについての失望後に生じるものであるという見解です。一つの解決方法は、新しい道を捜し、そこでまたはそれ故に、新しい憂鬱症（メランコリー）を許容することだといえます。なぜならば、憂鬱質の人（メランコリーカー）は、自らの不幸に対する鋭い眼力・慧眼を持ち、それにより他者の不幸に対してより鋭敏になっているからだといえます。

哲学者ヴィルヘルム・シュミット（Wilhelm Schmid）氏は、政治家たちが常に自信・確信を持ち、自分の判断により独立して行動し、機敏であるべきで、自身に中断や憂鬱を認めることは許されないという点に問題があるとみています。そのような状況に左右され、損失を甘んじて受け入れなければならず、時折消極性を強いられる場合、政治家は、不作

為（行動しないこと）が行動することより良い時があるということを認めることが許されないし、それを認めもしなくなるといいます。これは良くない政治につながるといいます・・・。

さて、人はメランコリーに陥り、これが更に進むといわゆる鬱病（Depression）と呼ばれる病気となるというわけですが、数年前にゲーテでドイツ人の鬱病（Depression）を扱った際には、当時約 400 万人のドイツ人が鬱病にかかっていること、鬱病はまだ当時タブーテーマとされていたことなどを記憶しています。ある資料によりますと、現在もドイツでの鬱病患者は約 400 万人という数字が記載されていますが、これに加えてその軽症の気分変調症（Dysthymie）を患っている人が約 200 万人いるようです。この気分変調症（Dysthymie）と今回話題になっている憂鬱質（メランコリー）との関係までは調べられませんでした。どこかで重なっているような気がします。一方、日本での鬱病患者は、厚生省のデータによりますと、約 112 万人（2014 年）とのこと。同じ基準での患者数ではないため、単純には比較できませんが、大雑把に言ってドイツでの鬱病患者は日本と比べ人数および人口比共上回るようです。この数字の差はやはり特に秋～冬にかけての気候・風土の違いも関係しているのでしょうか。

ところで、今回放送に登場するデューラーの銅版画「メランコリア I」についてですが、彼の作品と言え、彼の自画像が余りに有名で「メランコリア I」については私は全く知りませんでした。また、Wikipedia によりますと、その版画の中に 4x4 の魔方陣（Magisches Quadrat）が描かれ、縦、横、斜めのいずれの列の和も 34 になっているだけでなく、この作品の制作年である 1514（15 と 14）が埋め込まれているのは本当に不思議な感じを受けました。更に、今回の放送・課題を通じてドイツの多くの文学、音楽の分野における芸術作品のベースにもなったメランコリーという概念について少しでも知ることができてよかったですと思います。哲学者ヴィルヘルム・シュミット氏と精神科医ギュンター・ゲッデ氏の主張については理解することが中々難しく、正しく理解できたかどうか分かりませんが、ドイツの様々な芸術作品における憂鬱（メランコリー）の与えた影響について改めて考えさせられ勉強になりました。

K. K.

2019年1月21日

2019年1月 Nr. 454

さて、今回の内容は、ある女性ラジオ・ジャーナリストが自分の両親（主に母親）との会話を彼等に内密に録音したものをベースに編集した„Mutti und ich“という企画番組からのものでした。

ある女性ラジオ・ジャーナリストは、週末に両親をちょっと訪問したとき、2年間に亘り録音装置を持って行き、母親と一緒に家事をしたり、その際お互いに話したりする間、その録音装置をどこかに置き、作動させていました。その録音装置が何時間も作動している間、その女性ジャーナリストは時々その録音のことをほとんど忘れていたこともありました。母親も自分が語ったすべてが録音されているということはたぶんほとんど意識していなかっただろうと思われます。彼女の娘である女性ジャーナリストがその録音の中から2017年5月9日の放送用に使いたいと考えた時に、その録音したものから使用してよいかどうか母親に間違いなく尋ねたでしょうし、母親も恐らくそれに同意していただろうと思われます。

さて、当該ジャーナリストである娘のシュヴァルツ（Schwarz）さんは、1972年にマインツで生まれ、2003年からベルリンのドイツ放送（Deutschlandfunk）で働いています。彼女の母親は1938年生まれで、3人の子供がいます。彼女はインタビューの場合とは異なり事前に何を話そうかと考えることはしなかったもので、彼女が話したすべての内容は全く普段通りの会話に聞こえます。彼女の夫は彼女より1歳年上です。彼は夫人ほど話し好きではないとのこと。彼は娘がちょっとまたベルリンから彼等のもとを訪ねて来たことを喜びましたが、少し話した後にすぐにまた自分の部屋に引き上げていきます。そこは地下にある部屋で、そこには格子状の採光用吹き抜けを通じてのみわずかに外気と光が入ってくるようになっています。

この部屋は、以前は3人の子供の遊び部屋でしたが、3人全員が家を出て行った後、父親である彼はそこを暗室にし、自分でフィルムを現像し、写真の焼き付けを行っていました。しかし、その後その暗室を仕事部屋に改造しました。彼は作家ですが、職業作家というわけではなく、趣味として物書きをしているといます。彼が書くのは、社会批判的な長編小説、キリスト教関係の長編もの、フランクフルト空港で離着陸する航空機の騒音を題材とする長編小説、それに加えて恋愛小説などです。ところが、それほど売れ行きは良くはないようです。小説を書くのは彼の趣味に過ぎないといえます。

その趣味には彼は一日に 2~4 時間を費やして取り組んでいます。そして、昼寝のときは半時間ほどそこでソファに横になります。彼の仕事部屋の一部は夫妻用となっていますが、物置部屋にも使われており、そこには自分たちが使い古したものの、捨てたくないものが保管されています。従って彼自身用としてはその場所は広いとはいえないですが、彼はそこで快適に感じています。そのような部屋は多くの男性には快適です。

シュヴァルツ夫妻は 1965 年に結婚しました。彼は彼女が最も愛して結婚した男性というわけではありませんでしたが、いい結婚生活でした。夫妻は今や既に 50 年以上結婚生活を送っており、互いにうまくやっているようです。この結婚は自治体の女性自治体係官、すなわちある女性神学者が仲介してくれたものでした。娘のシュヴァルツさんの洗礼式の際には彼女が代母になってくれたこともあります。

母親のシュヴァルツさんは、まだ子供だったとき中々苦労しました。彼女には兄が一人いましたが、兄はシュヴァルツさんに比べ母親により気に入られていたといいます。母が子供の時、母の母親〔つまりジャーナリストのシュヴァルツさんの祖母〕がこうして欲しいと思うほどにはちゃんとしていないことが祖母には気に入らなかったですし、祖母の目には母はひょっとして十分誠実でもなければ、十分品行方正でもなかったのかもしれない。母親のシュヴァルツさんはカトリックの地域に育ち、今でも毎日曜日には教会へ行き、食事前には感謝のお祈りをします。彼女は感情を表さないよう教育されたそうです。

母親のシュヴァルツさんは既にここ何十年来衣服という衣服は自分で縫っています。彼女は虚栄心が強く、比較的若い頃から首回りにしわが多くできたことをとても気にしています。彼女はしかしながら、美容整形手術を受けるという決心までには至りませんでした。

一方で彼女は、教育はとても重要だと思っています。それはおそらく彼女が販売員になるために、当時通っていた学校を 14 歳でやめなければならなかったことと関係しているでしょう。自分の教育・教養のために何がしかの努力をする目的で、週刊新聞「ディ・ツァイト」(Die Zeit) を予約購読していますが、多くの号が未読のまま置かれています。娘のシュヴァルツさんが訪れた際、1 年前の号が置かれていました。その号はあるフランス語の週刊新聞の編集部員たちに対する殺害の企てに関するニュースが掲載されたものでした……。

さて、娘のシュヴァルツさんが担当した 2017 年 5 月の放送は、それまでの 2 年間に何回か行った録音がベースになっていますが、実際に収録された時間はかなり長かったと想像できます。その中からどの部分を放送に使用するかという編集作業も大変だったろうと思われれます。どのような視点から編集したのでしょうか。今回の放送ではその編集したもの

からさらに短縮し 15 分程度が紹介されています。母親のシュヴァルツさんがかつて恋愛関係にあった会社の上司との思い出を語るシーンはとても生き生きとしており、当時を思い浮かべながらの彼女の話しぶりが特に私の印象に残りました。

母親のシュヴァルツさんは、自分の母親〔娘のシュヴァルツさんの祖母〕に受け入れられていないように感じると共に、自分より兄がより可愛がられていると感じていたことは、幼い彼女の心に傷を残していたのではないかと想像します。加えて彼女が販売員になるために 14 歳で学校をやめたのに対し、兄は医学を勉強することができたのですから、今から 60 年以上昔という時代背景を考えたとしても彼女の心にわだかまりが残っただろうと思います。もしその兄が現在存命中ならば、その兄との関係はその後はどうなっているのでしょうか。

さて、一方で、シュヴァルツさんの父親は *Hobby-Schriftsteller* ということですが、本の売れ行きは良くないようです。しかしながら、執筆に毎日 2~4 時間も費やしているのであれば、私の目には、これは趣味ではなくむしろ職業と言える気がしますが……。今回の放送テキストでは削除されていた部分に関し、検索で辿り着いた音声データによると、私の理解が正しければ、彼は既に在職中の 1980 年から書き始め、年金生活入ってからはさらに多く時間を費やし、現在は一日に 2~4 時間書いているということでした。そして今までに 14 冊出版しているようです。このような状況を考えると、私の印象としては、彼はもはや趣味作家の域を脱しており、職業作家と称してもよいのではないかと思います。また、この *Hobby-* という語は、*Hobbyfunker*, *Hobbygärtner*, *Hobbyfußballer*, *Hobbyfilmer* *Hobbytaucherin*, *Hobbywinzer* などが手元の辞書に掲載されていますが、その他にも数多くの語句が考えられ、大いに応用がききそうです。

ところで、母親のシュヴァルツさんはカトリックの地域で育ち敬虔な信者のようです。上記の通り、日曜日毎に教会に行き、食事前にお祈りをしていますが、放送によると更に台所の壁には十字架が掛けられているだけでなく、寝室にはローマ法王の写真も飾ってあるということです。これらの事実から母親のシュヴァルツさんは一般的なカトリック信者よりは信仰が深いという印象を私は持ちましたが、一般のドイツ人であれば彼女をどのような信者とみなすでしょうか（父親のシュヴァルツさんの信仰の深さに関しては放送でも触れられていないようですが、上記にもあります通りキリスト教関係の長編小説も書いたことがあることから判断すると、彼も夫人と同等レベルの信者なのかもしれません）。

ところで、2017 年は宗教改革から 500 年に当り多くの記念行事がドイツで開催されたようですが、最近宗教改革 500 年に関する文章（「時事ドイツ語 2018 年度版」 „Neuigkeiten aus Deutschland 2016/17“ 朝日出版社）を読んだ際に *vogelfrei* という語を知りま

した。ルターが「95ヶ条の論題」を撤回しなかったため、神聖ローマ帝国皇帝カール五世はルターを教会から追放し、かつ vogelfrei（「法の保護を奪われた」）にしたということです。そしてこの単語の語源は驚いたことに「罪人は死んでも埋葬されず、野ざらしにして鳥の餌食になった」ことに由来するということですが、何とおぞましいことでしょうか。現在では到底考えられないような刑罰が16世紀当時存在したことを改めて知りました。手元の Duden 独独辞典を調べると、den Vögeln zum Fraß freigegeben wie ein Gehenkter（絞首刑になった人の場合のように鳥の餌食にさせておく）という解説が掲載されていたので、納得した次第ですが、今まで・・・frei は、「・・・のない」(akzentfrei) や「・・・を必要としない」(zollfrei) と理解していましたので、vogelfrei の意味が全く分かりませんでした。・・・frei は、私が今まで理解していた意味以外にも存在することを「宗教改革から500年」という読み物を通じて知った次第です。

K. K.

2019年2月20日

2019年2月 Nr. 455

さて、今回の内容は、44年振りで見会った同級生三人がそれぞれ歩んできた人生、現在の心境およびものの考え方などについて語っているものとなっています。その内の一人エゴン (Egon) は今回の放送の担当記者でもあります。担当記者自身が番組の内容の一部を構成しているという点において前回1月 (Nr. 454) とは形式的な類似点があります。

三人の男の子、すなわちクラウス (Klaus)、フレッド (Fred) それにエゴンは上部ライン地方 (Oberrhein) の小さな村の出身です。彼等は1967年から1973年まで一緒に同じ実科学校に通っていました。今回クラウスは自分の60歳の誕生日会を開催し30人ほどの客を招待しましたが、その中に当時の同級生であるフレッドとエゴンも含まれていました。

さて、クラウスは現在、ポルトガルに住んでいますが、故郷の村の両親の家には屋根裏部屋をまだ持っています。しかしながら、彼の故郷の村をもはや故郷とは感じていません。彼にとって故郷とは、人生の伴侶であるブラジル出身のパオラ (Paula) と生活を共にしている場所、すなわちポルトガルです。クラウスは再三折に触れて生まれ故郷の村に好んでやって来ますが、死ぬまでずっとそこに留まることは考えられません。

フレッドは現夫人のロスヴィータ (Roswitha) とは14歳か15歳の時に知り合いました。それまではエゴンがフレッドの一番の友人でした。フレッドは、しばしばエゴンをモペットの後部座席に乗せてくれました。二人はフレッドのモペットで一緒に学校に行くだけでなく、週末にはよく近隣の村のスポーツ、消防、射撃それに釣などに関する各種イベントにも出かけました。ところが、フレッドがロスヴィータと知り合いになってからというのは、もはやエゴンをモペットに乗せなくなりました。それ以来エゴンに代ってロスヴィータがフレッドの後に座ることになりました。フレッドはエゴンより1歳年上でしたが、14歳になったとき、エゴンが自分とは異なるように成長し、他の道を選択し、異なる行動をしたと感じました。

フレッドは実科学校を卒業後、大学で更に学ぶことができるようにするため、ラシュタット (Rastatt) の技術系ギムナジウム (Technisches Gymnasium) へ進学しました。1975年、フレッドは19歳の時に、カールスルーエ大学で機械工学を学ぶために家を出ました。彼はその後29歳になってようやく故郷に戻る決心をしました。父親が重度の心臓病だったからです。フレッドは両親を大変身近に感じていました。彼は仕事関係の出張が多く、例えば米国、インド、中国に出かけますが、故郷に戻ると心が安まります。フレッドは村の

東の外れでリビングルームから自宅から 15 キロ離れたシュヴァルツヴァルトを眺めます。

ところで、フレッドとこの放送の担当記者であるエゴンは、ライン川を運行する船の上で育ちました。フレッドは後に彼の兄およびエゴンの姉と全く同様、ライン川で船を運行することを家業としている家族の子供用の施設で過ごしました。なぜならば、この子たちはそうしなければ定期的に学校に通うことなどできなかったからです。しかしながら、エゴンは、マンハイムのその施設の雰囲気が、母親がエゴンの姉を訪ねるために自分をそこに連れて行く度に、自分が就学義務に達しその施設に入所しなければならない場合、母親に自殺で脅すほどひどいと感じるほどでした。そのためエゴンの母親は、エゴンが 6 歳になったとき、姉もその施設から引き取り、夫、つまりエゴンの父親と一緒に船上生活をもはや送ることがなくなり、二人の子供達と一緒にグレフェルン (Greffern) で過ごしました。そして父親は乗船する船の種類を押し船に変更し、3 週間おきに、すなわち 14 日間乗船した後はその後の 7 日間を家で過ごすようになり、その間は子供達と一緒にいるようになりました。

さて、クラウスの父親は第二次世界大戦中アフリカで兵士として戦い、これにより筋金入りの平和主義者になりました。彼は戦時捕虜としてほぼ一年間米国にいました。兵役に対する彼の考えは子供達にも影響を与え、息子たちは、従って兵役代替社会奉仕勤務を行うことに決めました。一方フレッドは、まずは連邦国防軍で兵役に就きました。ところが、すぐそれは自分には適していないと気づき、兵役を打ち切って兵役代替社会奉仕勤務を行いました。

さて、クラウスは既にテュービンゲン大学で化学を学んでおり、後にフランスでワイン醸造学 (ギリシャ語で *Önologie*) を修めました。ワイン醸造学においてクラウスは博士論文も書いていました。彼はブランデーの製造、すなわちワインから製造されるアルコール含有量 15% 以上のアルコール飲料の製造を専門的に研究していましたが、現在はポルトガルの企業の製造監督部門で働いています。その会社ではとりわけポートワインの製造のために、ワインをブランデーに蒸留することが行われていますが、彼はそこでは特に品質管理を担当しています。

クラウスは既に子供のころから化学に興味を抱き、その後も変わりませんでした。しかし、エゴンは自分は将来どうすべきか分かりませんでした。そこでまずはドイツ連邦郵便に勤めました。そして彼はシュトゥットガルトへやって来ましたが、大都市生活に馴染んだ職場の同僚とうまくいきませんでした。彼は結局、郵便局勤めを辞めてから、後年アビトゥアに合格後、ベルリンでドイツ文学・語学を学び、後年パリ在住中ラジオ関係の仕事に出会しました・・・。

さて、フレッドがモペットを運転していた 70 年代はまだ運転免許を必要としなかった時代だと思われませんが、最高スピードが時速 40 キロ程度に制限されていたとは言っても、今思えば 14 歳または 15 歳の少年の運転というのは、危険な行為だったのではないかと私には思えます。しかもヘルメットの着用もしなかったといえますから尚更危険だったろうと推察します。村での運転とはいえ、交通事故がなかったのは本当に幸運だったと思います。

ところで、60 歳の誕生日を迎えたクラウドが今回、30 人程を招待しましたが、誕生日を迎える本人が客を招待するというのは、日本とは逆だと感じました。というのは、日本では誕生日を迎えた人は招待されることが一般的だからです。私が約 30 年前にドイツ勤務中にこれと類似の経験をした時は、日本との違いを感じとても驚いたことを思い出しました。

私がまた驚いたのは、フレッドやエゴンが船上で親と過ごしたという点です。確かに両親共乗船していればどこかで預かってもらえない限り他に手段がないわけですが、今まで船乗りの家族の幼い子供がどこで過ごしているかなどということは考えたこともありませんでした。日本では恐らく父親が船乗りの場合（母親だけが船乗りというのはちょっと考えられませんので）、母親が家庭で幼い子供の面倒をみているというのが一般的ではないかと想像します。さて、フレッドは 1 歳から 6 歳まで船上で過ごした後で、施設に移ります。一方、エゴンはその施設に収容されるなら自殺するとまで言って母親に抗議したといいますが、母親に連れられて姉を訪ねるたびに、エゴンは一体その施設で何を見て、具体的にどう感じたのでしょうか。放送ではその雰囲気をつらうらと表現されていますが、具体的にはどのような状況だったのでしょうか。いずれにしても、幼い Egon は相当ショッキングな光景を目にしたのだらうと思います。

ところで、エゴンが職場で休憩中に Bild-Zeitung を読んでいることを女性の同僚から非難される箇所が印象的です。エゴンとしては父親が普段家でやっていることをしていただけでしたが、Bild-Zeitung がどのような評価を受けている新聞かを考えれば軽率な行為だと分かったはずでしたが、当時は考えが及びませんでした。また、小さな村の出身のエゴンは、自分の田舎のしゃべり方や習慣を断ち切ろうとしますが、経験不足や無知から来る劣等感を抱き続け、結局自分の居場所がなくなって職場から去ることになります。職場にはそのような彼を受け入れてくれたり、話し相手になってくれたりする人物との出会いがなかったことが原因だと思いますが、それが彼には不幸だったのかどうかは判断できないと思います。なぜならば、その時点では残念なことだったかもしれませんが、その挫折があって、後年アビトゥアに合格後、現在の仕事に就いていることを考えれば（殊に彼が現在の仕事に満足ならば）、郵便局を辞めたことは良かったとも言えるからです。エゴンに関しては父親との関係で強く印象に残ったことがもう一つあります。それは、エゴンが郵

便局勤めを辞め、青少年ホームで実習をしていることを父親に伝えた際、父親から浴びせられた「お前は私の人生での最大の失望だよ」という言葉です。これにはエゴンが深く傷ついたものと思われます。父親にしてみれば郵便局勤めは将来の安定が保障されている良い職場であると理解していましたので、息子の行動が全く理解できなかったとはいえ、怒りに任せて激しい言葉を発してしまいました。これはエゴンには相当ショックだったろうと思います。もっとも、エゴンが事前に父親に相談もなく辞めたことも窺われますので、息子の退職は寝耳に水で、父親も感情的になってしまったのかもしれませんが。

さて、今回の放送・課題においては、クラウドとフレッドの故郷に対する考え方の違いが描写されている箇所が興味深いものがありました。クラウドは現在ポルトガル在住ですが、故郷の村の両親の家には屋根裏部屋をまだ持っています。しかし、彼の故郷の村をもはや故郷とは感じておらず、自分の人生の伴侶であるパオラと生活を共にしているポルトガルが故郷だと考えています。生まれ故郷の村に時折戻ってくることは好きですが、死ぬまでずっとそこに留まることは考えられないといいます。一方、フレッドは現在故郷に戻って生活しています。実科学校を卒業後、大学で更に学ぶことができるようになるため、ラシュタットの技術系ギムナジウムに進学し、19歳の時にカールスルーエ大学で機械工学を学ぶために家を出ましたが、その後29歳になってようやく故郷に戻る決心をしました。彼は職業上海外出張も多いですが、故郷に戻ると心が安まるといいます。彼等と比較し、エゴンは故郷に対してどのような考えを持っているのでしょうか。また、兵役に関してはフレッドとクラウド共、代替の社会奉仕を行いました。エゴンに関しては連邦国防軍で通常の兵役を務めたのか、それとも二人と同じく代替の社会奉仕を行ったどうかは触れられていないようです。二人と比較する上では私としてはエゴンに関するこの二点も知ることができれば更に良かったと思います。

K. K.